

## 視点1

# 「安全」は日々の保育の充実から

當銀玲子

(公立幼稚園園長)

## はじめに

東日本大震災から三年余りがたちました。各施設では、その時に経験したことや今後起こり得る災害を想定して、「安全教育」や「安全管理」の見直しが行われたことと思います。筆者の勤務する浦安市もこの日、大規模な液状化被害に見舞われ、現在も被害にあった地区では重機が入り、復旧復興工事が行われています。一方、市は防災計画の見直しを行い、それぞれの施設においても、防災マニュアルを作成し、避難訓練を含む「安全教育」や「安全管理」の見直しが行われています。

## 3・11のもう一つの被災事例

ここで、平成二十三年三月十一日、東日本大震災時、震源地から遠く離れた千葉県浦安市での事例をお話します。

本市は、その多くが東京湾の埋め立て地からなり、バリアフリーできれいに整備された、「安全・安心」で子育てのしやすい町でした。その町並みが液状化により、道路や広場、そして校庭も見るとちに泥沼化し、電信柱やガードレールが傾き、ライフラインも甚大な被害を受けました。被災地域の園では園庭から泥が吹き出し、沼のようになり、園舎やテラス、非常階段などは亀裂や大きな段差ができ、上

當銀玲子（とうぎんれいこ）

浦安市立美浜南幼稚園園長。十数年前より、園庭環境の改善をテーマに共同研究を行ってきました。子どもたちにとって魅力ある環境、学び多き環境を追求しています。

下水道も使用できなくなるなど、幼稚園、小・中学校だけではなく、保育園も一時休園せざるを得ない状況となりました。

保育園では、子どもたちがそろそろお昼寝から起きてくるころでした。バリアフリーのA園は、一度は一階玄関フロアに子どもを集めました。が、わいてくる泥水が園舎内に侵入してきたので、その泥の侵入を防ぐ一方で、子どもたちを二階に避難させました。B園は、乳児を避難車に乗せ、幼児は徒歩で近くの避難所に移動しようとしたが、噴出した泥に阻まれ途中で動けなくなり、地域の方々に助けられ、やっとの思いで避難所に到着しました。C小学校では、児童たちが校庭に避難する際、校舎と地面との間に生じた段差に躊躇して立ち止まったり、泥に足を取られ転倒したりするなど、大変な状況がありました。

### 地域で起こり得る災害を想定して

以前、幼稚園を訪問し、「安全教育」について伺うと、避難訓練や交通安全指導等の安全計画が示さ

れ、さらに、日々の遊具や用具の安全な使い方も指導しており「安全」はほぼ確保されています、という説明がありました。確かに、避難訓練は、どの園でも月一回行われ、内容も差はなく、火災、地震、不審者侵入を想定し、バランスよく計画的に実施されています。

振り返れば、保育室にストープがあった時代は、火災を想定した訓練が多く、一九九五年に阪神淡路大震災が起きてからは地震を想定した訓練が増え、二〇〇一年の大阪教育大学附属池田小学校の事件以降は不審者侵入を想定した訓練も組み込まれ、訓練内容はその時代の出来事や状況に応じて改善してきました。東日本大震災を経験してからは、海に近い地域は津波を想定した訓練も行っているのではないのでしょうか。

最近では竜巻や巨大台風による風水害が発生するなど、子どもたちの安全を脅かす要因は多様化しています。情報があふれ、対応に悩まされますが、地域によって想定される被害状況は異なることから、各施設が関係機関と連携する中で、正確な情報を得

て、実態に即した可能な限りの対応策を考えていく必要があるでしょう。

### 危機回避は信頼関係から

東日本大震災後の安全に関する調査では、小・中学校の避難訓練の成果が明らかに、「安全教育」、特に避難訓練の重要性が高まっています。そこで保育園や幼稚園でも避難訓練に重きが置かれ、計画通りできていれば一安心と考え、できていなければそのための練習を行うなど、幼児の日常生活からかけ離れたところに力が注がれているような気がします。

幼児は、避難訓練と伝えていてもサイレンの音を聞いて泣いてしまったり、訓練があることで登園を渋ったり、年齢が低いほど訓練の意味を理解することとは難しいようです。避難は訓練を重ねることに慣れて上手になります。訓練により手順や動作などの形だけを教えることは、偏った学びになるような気がします。また、事前に危険なことを知らせたり教えたりすることも必要ですが、それだけでは、自ら考え行動する力が育ちにくいと考えます。

幼児の発達を考えますと、災害時には、避難行動のどの段階、どの場面においても、一番必要とされるのは、教師の指示に従い落ち着いて行動できることとあります。これは、教師と子どもとの信頼関係が築かれているかにかかっており、災害時、不審者との遭遇時など、どのような場合でも、教師を信頼していれば、指示を聞き入れることができ、一緒に避難行動、危機回避の行動をとることができるでしょう。教師と子どもとの信頼関係の構築は、避難時のみならず、幼児教育の基本となるものです。

### 幼児教育の基本を大切に

幼児期の教育は、「遊びによる総合的な指導」であり、「環境による教育」であります。幼児は好奇心が旺盛で、生活や遊びの中でいろいろな経験を積み重ね、さまざまな力を獲得していきます。しかし、状況を判断して行動することは難しく、危険を伴う場面も多く見かけられます。そこで、保育者が意図的に気付かせる場面も必要であり、幼児の動きを想定して「環境」を整えることも重要であり、その環

境は、「安全を確保する環境」のみではなく「安全を学べる環境」である必要があります。もしも園庭から危険をすべて取り除いたら、子どもたちにとって魅力のない、学びの少ない園庭となるでしょう。

震災で液状化した園庭整備の過程で、気付かされたことが幾つかあります。一つは園庭の水たまりです。液状化による泥は取り除いたものの、水はけが悪く凸凹。雨が降れば水たまりができ、職員は困っていました。子どもたちは長靴で楽しそうに遊びます。子どもたちにとって水たまりは楽しい遊び場でもありますが、水に濡れないよう飛び越したり、迂回したり、状況に応じ考えて行動する学びの場でもあります。

もう一つは、築山修復工事です。低くなった築山に土を盛るために黒土の袋を積み上げておいたところ、それを見つけて子どもたちはよじ登り、滑り始めました。ちょっと急なため、四つんばいで登り、下りは凸凹感を楽しみながらお尻で滑り降りるのです。この様子から、新しい築山は以前より高く土を盛り、シートを掛けて滑ることもできるようにしま

した。登るには助走が必要で、気を抜くと滑り落ちてしまう築山ですが、そこには幼児が工夫したり何度も挑戦したりする姿があります。

### おわりに

震災を経験し、安全に関して一番思うことは、いかに子どもたちに安心感を与えられるかということです。幼児と教師との信頼関係はもとより、震災を経験してさらに深まった地域の方々との関係は、子どもたちがいつも見守られているという安心感につながっています。

また、「安全教育」は、非常時のみにとらわれるのではなく、日々の保育の充実であり、遊びの中から一人ひとりの安全に対する能力を育てていくことが重要で、「安全管理」もこの幼児教育の基本を踏まえ見直す必要があるでしょう。

安全は、幼児が幼児期にふさわしい生活の中で育まれること、そのための人的・物的環境を整えることにあると思います。